

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(国内学術論文・査読付)				
1 「血清過酸化脂質におよぼす激運動および強制トレーニングの影響」	共著	1988年10月	『日本生理人類学雑誌』	熊谷秋三、長谷川亨、江村(庄野)菜穂子、友国勝麿、西住昌裕、7:215-221,1988  体力水準の高いトライアスリートにおいてレース前後の血清過酸化脂質には有意な変化を認めなかった。ラットに対する強制トレーニング結果から、有酸素性作業能の改善に伴う抗酸化系酵素活性上昇の影響が示唆された。
2 「血中乳酸の変移点を指標としたエアロビックダンスエクササイズ運動強度」	共著	1989年6月	『体育の科学』	江村(庄野)菜穂子、熊谷秋三、市場正良、西住昌裕、9:189-202, 1989  一般的なエアロビックダンスの運動強度を血中乳酸レベルによって評価した結果、主運動において乳酸レベルが上昇し、その後の心拍数の低下に反して乳酸レベルは高値を維持していた。
3 「運動に関連した疾病・傷害の頻度－医療者側からの調査－」	共著	1989年10月	『臨床スポーツ医学』	西住昌裕、江村(庄野)菜穂子 6:1161-1167, 1989  佐賀県内の医師 928 名を対象とした調査の結果、運動に関連して発生した疾病や傷害発生時の身体状況として肥満、高血圧などの危険因子を有する場合が多いことを報告した。
4 「閉経前肥満女性の糖・脂質代謝に及ぼす性ステロイドホルモン、体脂肪分布、体力および身体運動効果」	共著	1991年3月	『体力研究』	熊谷秋三、江村(庄野)菜穂子、近藤芳昭、江口闊、西住昌裕 77:19-37, 1991  閉経前肥満女性を対象とした乳酸閾値のトレーニングの結果、最大酸素摂取量の変化と性ホルモンレベル、血中脂質レベルとの間に関連性を認めた。
5 「閉経前肥満女性における糖・脂質代謝指標と体力・身体計測指標および性ホルモン結合グロブリンとの関係」	共著	1992年8月	『体力科学』	熊谷秋三、 <u>庄野菜穂子</u> 、近藤芳昭 41:485-494, 1992  閉経前肥満女性における血中糖・脂質レベルは有酸素的作業能との関連が強く、脂質レベルには性ホルモン結合蛋白や肥満度の影響も認められた。

6 「肥満女性の身体特性および心理特性に及ぼす有酸素的トレーニングの影響」	共著	1992年11月	『臨床スポーツ医学』	庄野菜穂子、熊谷秋三、近藤芳昭、西住昌裕、9:1277-1283, 1992  肥満女性を対象として監視下の運動教室を半年間実施した結果、減量の程度と心理状態の変化の間に有意な関連を認めた。
7 「健常成人男性の糖・脂質代謝指標と性ホルモンおよび性ホルモン結合グロブリンと関連性」	共著	1993年8月	『動脈硬化』	熊谷秋三、佐々木悠、 <u>庄野菜穂子</u> 、森山善彦 21:503-509, 1993  成人男性 235 名における性ホルモンレベルの決定要因としては年齢が最も強く、性ホルモン結合蛋白には年齢のほか肥満度の影響を認めた。
8 「健常男性の sex hormone binding globulin と HDL コレステロールおよびインスリンとの関連性」	共著	1993年9月	『日本生理人類学雑誌』	熊谷秋三、佐々木悠、 <u>庄野菜穂子</u> 、森山善彦、片伯部広太郎 12:297-300, 1993  成人男性 235 名における血中性ホルモン結合蛋白レベルは HDL コレステロール値には関連するものの、インスリンレベルへの影響は認めなかった。
9 「病院の広告と患者の受療行動」	共著	1994年7月	『病院』	森満、 <u>庄野菜穂子</u> 、檜垣靖樹、古賀義孝、53:618-621, 1994  病院広告は心理学的要因として患者の受療行動に影響を及ぼす可能性があることを報告した。
10 「成人男性の性ホルモン、体脂肪分布、体力と糖・脂質代謝指標との関連性」	共著	1995年2月	『健康科学』	<u>庄野菜穂子</u> 、檜垣靖樹、西住昌裕、佐々木悠、熊谷秋三、17:75-86, 1995  成人男性 217 名における血中の性ホルモン結合蛋白や DHEA-S レベルは、HDL コレステロール値に独立した関連性を有する事を報告した。
11 「閉経前後の女性における超音波法による骨密度に関する研究」	共著	1997年1月	『日本衛生学雑誌』	<u>庄野菜穂子</u> 、久木野憲司、吉田節子、中山実生子、上野裕文、西住昌裕、51:755-762, 1997  閉経前後の女性 44 名を対象として、踵骨骨密度と栄養摂取状況および性ホルモンレベルとの関連性は、閉経前と閉経後の女性では異なることを報告した。
12 「健康づくりのための運動の継続性に関する要因」	共著	1997年3月	『厚生指の指標』	<u>庄野菜穂子</u> 、西住昌裕、44:31-35, 1997  保健所主催の健康づくり教室受講者 193 名に対して教室終了後に調査を実施した結果、運動継続要因は理解者の存在、目標意識の有無などであった。
13 「糖負荷後のインスリン値に及ぼす持久的能力及び体脂肪蓄積の影響」	共著	1997年7月	『日本衛生学雑誌』	檜垣靖樹、 <u>庄野菜穂子</u> 、西住昌裕 52:504-510, 1997  若年成人男性を対象とした横断研究において、高インスリン状態を呈する者における生活習慣の特長や最大酸素摂取量の低下について報告した。

14 「佐賀県における小学児童のアレルギーに関する調査」	共著	1998年7月	『日本公衆衛生雑誌』	甲斐今日子、西住昌裕、森満、 <u>庄野菜穂子</u> 、 <u>檜垣靖樹</u> 、45:625-633, 1998  小学児童 2795 名について保護者を対象とした調査の結果、男子と女子、山間地区と臨海地区での相違点が明らかとなった。
15 「市民の日常生活状況と健康度に関する研究」	共著	1998年8月	『厚生指標』	<u>檜垣靖樹</u> 、森満、原めぐみ、 <u>庄野菜穂子</u> 、甲斐今日子、西住昌裕、45:21-26, 1998  鳥栖市健康診査受診者 302 名において、1 日歩数が多い人ほど自覚的健康感や HDL コレステロール値は高く、中性脂肪値や動脈硬化指数は低い傾向であった。
16 「気功教室参加者の主観的な心身の健康状態および血清脂質における変化」	共著	1998年12月	『臨床スポーツ医学』	<u>庄野菜穂子</u> 、矢山利彦、林田陽子、西住昌裕、15:1416-1422, 1998  高齢者を対象とした気功による健康づくり教室の成果として、精神的健康度の改善、身体活動量の増加に伴う血中脂質の改善を報告した。
17 「SU 剤二次無効例への外来インスリン導入」	共著	1999年11月	『プラクティス』	三村和郎、 <u>庄野菜穂子</u> 、岡田朗、大中桂三、下田聖子、梅田文夫、名和田新、大島文雄、三村悟 16:659-663, 1999  糖尿病外来患者におけるインスリン治療導入方法の実際、および外来導入成功群と不成功群の特徴を比較した。
18 「若年及び中年男性の踵骨骨密度とその関連要因」	共著	2000年7月	『日本衛生学雑誌』	<u>庄野菜穂子</u> 、近藤芳昭、 <u>檜垣靖樹</u> 、西住昌裕、55:516-522, 2000  成人男性 84 名を対象とした横断研究の結果、超音波法による踵骨骨密度の関連要因は若年男性と中年男性において異なる傾向が示唆された。
19 「コンデンサー製造作業者に発生したピロール曝露による肝障害」	共著	2000年9月	『産業医学ジャーナル』	西住昌裕、福嶋博愛、 <u>庄野菜穂子</u> 23:56-59, 2000  コンデンサー製造作業者に集団発生したピロール曝露による肝障害の発見から事後対策までを報告した。
20 「体脂肪蓄積の説明要因としての骨格筋毛細血管の関与」	共著	2001年4月	『肥満研究』	<u>庄野菜穂子</u> 、 <u>檜垣靖樹</u> 、進藤宗洋、田中宏暁、7:61-65, 2001  非肥満者と肥満者を含む男性 40 名を対象とした横断研究の結果、体脂肪蓄積に対する筋線維組成の影響は明らかでなく、むしろ筋毛細血管密度の影響が有意であることを報告した。

21 「整形外科外来での内科的運動療法の試み -Multiple Risk Factor 保有者を対象として-」	共著	2002年5月	『プラクティス』	庄野菜穂子、松永和美、道下竜馬、石坂ひとみ、真子千秋、鶴田敏幸 19:327-333, 2002  整形外科医院のリハビリテーション室を活用して、内科的疾患改善を目的とした運動療法外来の実施方法、効果、問題点などについて報告した。
22 「Multiple Risk Factor 保有者の運動療法における乳酸閾値に相当する目標心拍数予測式の検討」	共著	2003年4月	『体力科学』	庄野菜穂子、道下竜馬、松永和美、鶴田敏幸、52:141-148, 2003  冠動脈疾患危険因子を複数保有する男女における乳酸閾値強度の心拍数は従来推奨されている年齢別心拍数よりも有意に低いため、健常者用の運動強度設定方法を適用すると過度の負荷になる可能性があることを報告した。
23 「有患者の肥満度改善に必要な週あたりの運動時間の検討」	共著	2003年4月	『肥満研究』	道下竜馬、松永和美、鶴田敏幸、 庄野菜穂子、9:39-44, 2003  肥満を合併した有患者における肥満度の改善は、厚生労働省が提示している「健康づくりのための運動所要量」未満でも可能なことを報告した。
24 「血中乳酸閾値強度での自転車トレーニングがエネルギー基質としての脂質利用に及ぼす影響」	共著	2003年1月	『九大農学芸誌』	音成道彦、松原健史、内藤聖子、劉忠峰、大瀬雄也、庄野菜穂子、田中守、清永明、田中宏暁、進藤宗洋、立花宏文、山田耕路 58:19-26, 2003  健常男性8名を対象とした乳酸閾値強度のトレーニングの結果、同一運動強度での脂質燃焼比率は有意に増加し、主働筋における脂質酸化能力の亢進と糖質利用の抑制が示唆された。
25 「肥満女性における高感度CRPと食後糖脂質代謝との関連」	共著	2005年4月	『肥満研究』	庄野菜穂子、道下竜馬、鶴田敏幸、野出孝一、11:52-57, 2005  閉経前後の肥満女性43名を対象とした横断研究の結果、高感度CRPの高い群は、食後のインスリン値および食前食後の遊離脂肪酸値が有意に高値であり、潜在的なハイリスク者の予測に役立つ指標であることを報告した。
26 「Multiple risk factor 保有者の運動負荷心電図ST下降負荷強度、乳酸閾値および冠動脈疾患危険因子との関係」	共著	2005年4月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、庄野菜穂子、笠原貴紀、鶴田敏幸、13:226-233, 2005  冠動脈疾患危険因子を複数有する男女において、乳酸閾値強度は運動負荷心電図ST下降に先行する安全性の高い運動強度であり、ST下降の予測因子としてインスリン抵抗性、血糖値、尿酸値に注意が必要なことを報告した。

27 「耐糖能異常の女性における血中乳酸閾値の心拍数と自転車仕事率」	共著	2005年6月	『糖尿病』	庄野菜穂子、道下竜馬、笠原貴紀、鶴田敏幸、48:423-428, 2005  耐糖能異常女性は耐糖能正常女性と比較して乳酸閾値強度の体重あたり自転車仕事率が有意に低く、その原因として危険因子重複状態や脚筋力の低下が影響している可能性が示唆された。
28 「Multiple Risk Factor 保有女性における変形性膝関節症の有無と肥満度ならびに有酸素性作業能力との関係」	共著	2006年8月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、庄野菜穂子、笠原貴紀、鶴田敏幸、14:384-390, 2006  冠危険因子を複数有する女性を対象とした横断研究の結果、変形性膝関節症の有無は、有酸素性作業能力に影響を及ぼす可能性を報告した。
29 「週あたりの運動時間が肥満者の冠危険因子改善に及ぼす影響」	共著	2007年8月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、庄野菜穂子、笠原貴紀、鶴田敏幸、15:413-419, 2007  冠危険因子保有者60名を対象に12週間にわたって乳酸閾値強度の運動療法を実施し、週あたりの運動実施時間による改善効果の相違を報告した。
30 「有疾患に対して安全な運動処方」	共著	2008年8月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、庄野菜穂子、鶴田敏幸 16(3):457-470, 2008  危険因子や疾患を有する者において、一般健常者とは異なる安全な運動処方の必要性および実際の方法について報告した。
31 「遺伝子発現解析を目的とした骨格筋少量採取のための生検針応用方法の開発」	共著	2008年9月	『福岡大学スポーツ科学研究』	飛奈卓郎、森里子、阿部征次、西田裕一郎、庄野菜穂子、清永明、進藤宗洋、田中宏暁、39:95-100, 2008  遺伝子発現の分析を目的とする筋組織量を短時間で簡便に採取できる小径針筋生検方法を開発した。
32 「変形性膝関節症を有する生活習慣病患者に対する安全な運動処方の検討」	共著	2008年4月	『運動・物理療法』	道下竜馬、庄野菜穂子、笠原貴紀、鶴田敏幸、19(4):322-331, 2008  変形性膝関節症を合併している冠動脈疾患危険因子保有女性への運動処方は、無酸素性作業閾値よりさらに低い強度が望ましいことを報告した。
33 「冠危険因子の集積ならびに運動耐容能の低下が閉経後肥満女性の安静時心電図 QTc 間隔に及ぼす影響」	共著	2009年1月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、庄野菜穂子、笠原貴紀、鶴田敏幸、17(1):84-91, 2009  閉経後肥満女性90名を対象とした横断研究の結果、運動耐容能の低下と冠危険因子の集積は、相乗的に心電図 QTc 延長に影響を及ぼすことを報告した。

34 「肥満者におけるインスリン初期分泌能と日常活動量、運動耐容能力、冠危険因子との関係」	共著	2009年1月	『日本臨床スポーツ医学会誌』	道下竜馬、 <u>庄野菜穂子</u> 、笠原貴紀、鶴田敏幸、17(1):51-58, 2009  肥満男女144名を対象とした横断研究の結果、インスリン初期分泌能の低下には冠危険因子の集積状態や日常活動量低下が関連することを報告した。
35 「運動指導時の安全管理に関する運動指導者側の実態調査」	共著	2009年10月	『臨床スポーツ医学』	<u>庄野菜穂子</u> 、道下竜馬、音成道彦、林ちかこ、26(10):1319-1324, 2009  健康運動指導士をめざす運動指導者120名を対象に自記式質問紙による調査を行ない、運動指導時の安全管理に対する体制や意識について報告した。
36 「中小企業における7年間のメンタルヘルス対策に伴う疲労蓄積度の変化」	共著	2016年4月	『産業精神保健』	<u>庄野菜穂子</u> 、松永一成、音成道彦 24(2):142-150, 2016  国内中小規模会社における継続的なメンタルヘルス対策によって労働者における疲労蓄積度の改善や健康障害発生の抑制に寄与する可能性が示唆された。
(国内学術論文・査読なし)				
1 「日常の運動実施の有無が遺伝的高血圧素因を有する中高年者の運動時心血管応答および血圧調節関連物質に及ぼす影響」	共著	1988年3月	『デサントスポーツ科学』	熊谷秋三、 <u>江村(庄野)菜穂子</u> 、近藤芳昭、西住昌裕 9:189-202, 1988  高血圧素因を有する中高年者において、動習慣の獲得は運動時血圧や血圧調節物質の反応を良好に維持する効果があることを報告した。
2 「音楽の有無がエアロビクダンスエクササイズの実験強度および運動前後の気分の変化に及ぼす影響」	共著	1990年7月	『九州スポーツ医学・科学会誌』	<u>江村(庄野)菜穂子</u> 、熊谷秋三、西住昌裕 2:139-142, 1990  エアロビクダンスにおいて音楽は運動中の生理的反応に対する主観的疲労感を緩和する効果があることを報告した。
3 「日常の身体活動中の血圧応答と体脂肪分布の影響」	共著	1990年7月	『九州スポーツ医学・科学会誌』	近藤芳昭、熊谷秋三、 <u>江村(庄野)菜穂子</u> 、西住昌裕 2:125-128, 1990  24時間血圧連続測定による活動時の血圧応答の高いものにおいて、肥満度のみならず、腹部体脂肪蓄積の影響が示唆された。
4 「九州一周駅伝佐賀県選手のメディカルチェック—特にSP-OBLAと競技成績について—」	共著	1990年7月	『九州スポーツ医学・科学会誌』	忽那龍雄、川口宗義、西川英夫、 <u>熊谷秋三</u> 、 <u>江村(庄野)菜穂子</u> 、末次康裕 2:85-91, 1990  競技成績とOBLA速度との間に有意な関連性が認められた。

5 「成人男性の肥満度・体脂肪分布・体力と性格・食行動との関連」	共著	1991年6月	『九州スポーツ医・科学会誌』	江村(庄野)菜穂子、熊谷秋三、西住昌裕 3:101-104, 1991  成人男性において性格特性と年齢との関連を認めたが、肥満や体力との関連性は認めなかった。
6 「企業内運動実践が成人病危険因子に及ぼす影響—肥満とメンタルヘルスを中心に—」	共著	1995年7月	『産業医学ジャーナル』	岸川靖、庄野菜穂子、市場正良、家永佐智子、熊谷秋三、西住昌裕 18:56-63, 1995  肥満を有する男性従業員を対象とした運動指導の結果、運動実施量に依存して最大酸素摂取量の増加、肥満度や血中脂質の改善、睡眠や気分の改善効果があった。
7 「肥満、糖・脂質代謝とステロイドホルモン」	共著	1996年3月	『健康科学』	庄野菜穂子、熊谷秋三、佐々木悠 8:21-44, 1996  肥満、体脂肪分布および糖・脂質代謝についてステロイドホルモンの影響に注目して解説した。
8 「肥満:その成因と改善、および耐糖能への骨格筋の関与」	共著	1996年10月	『臨床スポーツ医学』	熊谷秋三、花村茂美、庄野菜穂子、田中喜代次、浅野勝己 13:531-536, 1996  骨格筋の筋線維組成や毛細血管密度が肥満の原因や改善過程にどのように関与するかについて解説した。
9 「有酸素運動継続者の要件と、成人病危険因子低減効果持続性に関する調査研究」	共著	1998年3月	『大和証券ヘルス財団研究業績集』	庄野菜穂子、檜垣靖樹、西住昌裕 21:185-190, 1998  運動継続者の特性と危険因子改善効果について、地域の健康教室参加者を対象とした調査結果を報告した。
10 「骨格筋線維維持性と血清脂質レベル—軽強度の運動トレーニングの影響—」	共著	2000年3月	『健康医科学』財団法人明治安田厚生事業団	庄野菜穂子、田中宏暁、進藤宗洋、水野眞佐夫、Bengt Saltin, 15:44-52, 2000  成人男性血中脂質レベルに対する運動トレーニングの影響と骨格筋線維の変化との関連性を検討した。
11 「トレーニング時の運動強度の違いが骨格筋毛細血管分布に及ぼす影響」	共著	2004年3月	『健康医科学』財団法人明治安田厚生事業団	庄野菜穂子、音成道彦、松原建史、村上清英、内藤聖子、劉忠峰、田中宏暁、進藤宗洋 19:34-42, 2004  軽強度のトレーニングによっても一定の運動量をこなすことによって、高強度トレーニングに匹敵する毛細血管変化が得られる可能性が示唆された。

12 「生活習慣病の運動療法に関する医師対象アンケート調査結果報告」	共著	2009年4月	『医界佐賀』	庄野菜穂子、志田正典、中尾俊憲 1027:41-47, 2009
13 「佐賀県における運動療法連携システムの紹介」		2010年5月	『医界佐賀』	庄野菜穂子、志田正典、中尾俊憲 1039:58-62, 2010
				運動処方や運動指導について、一般の医師は時間的、技術的な課題を抱えていることから、専門の医師や運動指導者等の運動に関する専門家との連携の必要性が示唆された。
				生活習慣病等を有する患者を中心として、運動療法を遂行する連携システムの方法、今後の課題について報告した。